

2023 市民のつどい、第4分科会「平和を考える」に参加して

真田紀子

9月10日(日)に岡山市勤労者福祉センターで開催された標記の会に参加しました。

当日のテーマは“中国残留孤児から平和について考える～高杉久治さんの生きてきた道～というものでした。

最初に青木康嘉さんから残留孤児が生まれることになった経過がレクチャーされました。昭和恐慌の荒廃した国情の中、満州事変以後の国民的熱情が満州開拓を後押ししている。満州開拓移民は北米やブラジルへの移民と違い、日本国籍のまま移民でき、日本人コミュニティで日本人として生活できることが大きい。満州に行けば警察官になれる、校長になれる、土地がもらえる、家畜ももらえるということで、村議会で議決し分村という形での移民も多かった。

高杉久治さんは、敗戦の後、ソ連国境に近い場所から歩いて南に逃げる途中、3歳で母親とはぐれ、たまたま見つけてくれた中国人の妹の家にもらわれて育ててもらった。母と弟はその後収容所で亡くなっている。

次に則武弁護士が中国残留孤児国家賠償請求訴訟につ

いて説明されました。全国15か所で同様の裁判が起こされていた。争点の絞り込みとして、早期帰国実現義務違反—国民の帰国の権利を国が妨害した、自立支援義務違反などを根拠に闘い神戸地裁で勝訴となった。

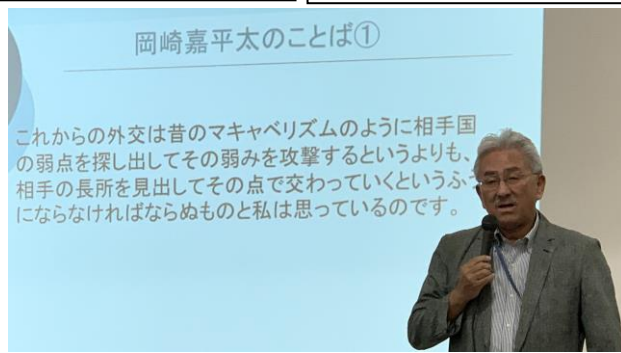
高杉さんが自分のことばで思いを語られ、二胡の演奏をされました。

最後に、介護施設「いほり」の井堀ご夫妻が話されました。祖母が1996年に帰国して、私たちが1999年に帰国しました。帰国してから子供が生まれ、子育てが一段落してから、両親が高齢化し日本の介護サービスを受ける中、言葉の壁で苦労しているのを知り、中国語でサービスを受けられる介護施設をつくりたいという思いをもち、周りの方々に支えられ「いほり」開業にこぎつけました。

報告の後、5つのグループに分かれ、今日の感想や思いを語り合いました。私の参加したグループでは、若い人にこういう話を聞いてほしい、どうすれば届くのかという声が出ていました。



高杉さん



則武弁護士



青木先生



井堀夫妻



安田奈津紀さん

「共に生きるとは何か」 安田奈津紀さんの講演を聞いて

犬飼 繁

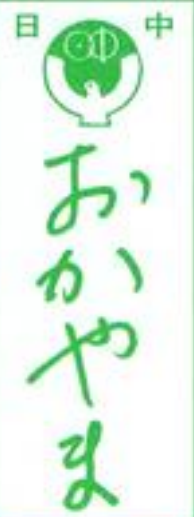
9月10日(日)に毎週朝8時からTBSのニュース番組、サンデーモーニングでコメンテーターとして活躍中の安田奈津紀さんの講演があると知り、行ってきました。

安田さんはフォトジャーナリストとして、シリアやパレスティナなど紛争地で取材し、写真を通して現地の人々の様子を報道されている方です。私は高校で「現代社会」という科目を教える過程で国際協力に関心を持ち、JICA(国際協力機構)の教師海外研修にも参加したことがあり、彼女の報道に注目してきました。また、安田さんのコメントはいちいち頷けるもので、「そうだその通りだ」と相槌を打ちながらいつも聴いています。

安田さんがウクライナに取材に行ったとき、「ブチャから夫婦と近所の方々と数台の車で脱出しようとしたところ、ロシア軍の攻撃にあい、夫は殺され、自分も鎖骨を粉々に粉砕された女性が、現在は安全なところで娘や孫と暮らしているのだが、孫が甘えてきても抱っこもしてやれないと語っていた。」という話

また、安田さんが子供のころ、母親がよく本の読み聞かせをしてくれたそうなのですが、いつも帰りが遅い父親が珍しく早く帰ってきたときに「今日はお父さんが読んで」とねだったのですが、子供用の本なのに父がスムーズに読めない。思わず彼女は「お父さん変だよ、日本人じゃないみたい」といったそうです。その後17歳になった安田さんはパスポートを取るために戸籍抄本を取り寄せたところ父親の欄に「韓国」と記載してあるのを見て、彼女は初めてそのことを知りました。そして自分がそういった時の父親の顔をまざまざと思い出したそうです。

その後、安田さんは父が韓国籍であることをカミングアウトしたのですが、それに対し SNS などで誹謗中傷が多く寄せられたということです。在特会など、本当に恥ずかしい、情けない人々がいることを心から悲しく思います。この講演の副題は「一難民の声、家族の歴史から考えた多様性」です。多様で寛容な社会でありたいものです。



題字 原田 親

No. 1006

2023/10/1

日中友好新聞

発行所 日本中国友好協会 〒111-0953 東京都台東区浅草橋5-2-5 4階 03-5621-2141 FAX 03-5621-2141

日中友好協会 岡山支部 〒719-8034 岡山市北区下伊福 西町1-53 民主会館1F TEL: FAX 0861-258-1804

日中友好協会 倉敷支部 〒713-8031 倉敷市福河町3-461-45 TEL: FAX 0861-411-7800

日中友好協会岡山支部ホームページ http://rizhongyouhou.oina.net メールアドレス nicchukayama@yahoo.co.jp



## 私の引き揚げ体験(その4) 倉敷9条の会 朝倉彰子

### 5. 引揚の日が来た

敗戦から11ヵ月後の昭和21年(1946年)7月、いよいよ引揚の日が来ました。この間、母は満州熱にかかり母乳も出なくなり、ミルクも手に入らず、妹は栄養失調になっていました。姉たちは粥をつくり、米粒をすりつぶして妹に飲ませました。

7月1日、私たち一家は撫順駅の前の広場に集められ、持ち物検査をされました。引揚者は1人千円の現金と靴3足、布団3組、その他衣類、食料などの持ち物が許可されていました。持ち物検査のため、撫順駅前の広場で、靴まで脱がされたのを記憶しています。

私は母の帯で作ったリュックにきゅうりをいっぱい入れて背負っていました。母は乾燥させた豚の肉など工夫をこらした食料を用意していて、私たちは飢えをしのぐことができました。姉に結婚を申し込んでいた中国の若い将校さんが荷車をプレゼントしてくれ、8人分の荷物を載せて出発しました。

母は1人布団3組を用意するのにあたり、ありったけの着物をほどき、縫い合わせ、中に真綿を薄く入れた軽い布団を24組作りました。母は持ち帰ったそれらの布団を再び着物に戻して神戸の高級住宅街に売りに出かけ、戦後の苦しい生活を乗り切りました。

途中の収容所で食料の配給を受けながらの旅でした。なべを持って長い行列に並び、配給を受けた日のことは今でも記憶に強く残っています。

私たちが無蓋列車に乗ったのは撫順駅から離れた貨物専用の駅でした。はぐれないように、姉の手を握って駅までの砂埃の舞う道を歩きました。夏の日が私たちをじりじりと照らしていました。無蓋の貨物列車の中で、雨の日は傘を差し、用便を足すのは命がけ、列車に乗り遅れないようにと必死でした。リュックを背負って元気よく歩いていた弟は引揚の途中、高熱を発しました。途中の収容所で治療を受けながら、帰国を急ぐ叔父夫婦と別れ、母子8人の私たちの引揚の旅は続きました。

### 6. 錦州の収容所での体験

錦州の収容所ですぐ隣にいた親子のことは今も忘れることができません。私と同じ年頃の幼い姉妹を残し、母親が亡くなりました。亡くなる前から蠅が飛び交い、母親の体にはウジが這い回っていました。「お母ちゃん、お母ちゃん」と2人は冷たくなっていく母親にすがって泣き続けていました。私はすぐそばでその様子を黙ってずっと見ていました。

私はその家族の故郷は広島だと聞きました。広島に、新型爆弾が投下され、町が壊されたという話は、私たちにも伝わっていました。小倉に帰るといふ男の人がその子どもたちを連れて帰ってくると聞きましたが、広島に帰った姉妹のその後の人生がどうなったのでしょうか。幸せになれたのでしょうか。

病院船は1ヵ月に2回の運航で、私たちはそれまで錦州の収容所で暮らしました。

長い列に並んで、1日3回、水、食料をもらう日が続きました。(いまでも長い列にならぶことは苦手です)

晴れた日は妹の白いおむつが風にはためいていた光景を今も思い出します。

### 7. 病院船橘丸

やっと私たちは病院船に乗れる日がきました。葫蘆島から乗った病院船の名前は橘丸。

病院船ということで、船内は病人であふれかえっていました。船底の何畳かの畳が私たちの居場所でした。すぐ目の前で医師や看護婦が病人、けが人の治療に当たっていました。手や足のない人たちもいました。弟は依然高熱が続き、母の顔も見分けることができず、顔は腫れ、耳の下から膿がたれていました。うわごとを言う日が続いていました。

近くには遺体置場があり、船内で亡くなった人が安置されていました。腐敗した臭いが船内に漂っていました。いったん安置された遺体はまた担架に乗せられて次々と私たちの目の前を運ばれていきました。

その亡骸は甲板から海に降ろされました。日本に上陸することも叶わず、多くの命が海の藻屑と消えました。葫蘆島を出るときは窮屈だった船内が、上陸の時にはガラガラになっていました。姉の記憶では8割近い人が亡くなったようでした。病院船ということで、他の引揚船より多くの死人が出たのでしょう。橘丸は定員が1300人です。1000人近い人が亡くなったのです。何十人何百人もの人の腐乱した臭いが、船を降りた後でもどこからか臭ってきて、離れませんでした。あの臭いは死ぬまで忘れないでしょう。

船底の丸い窓ガラスには、ただ青黒い海の水が見えていました。息苦しさから逃れて私たちは甲板に上がりました。大人も子どもも「花つむ野辺に日は落ちて・・・誰か故郷を想わざる・・・」と落ちていく夕日を見ながら一日も早く日本に戻りたい思いで、大声で歌いました。

私たちは時々、船員さんの部屋に行き、おにぎりや、時には菓子をもらったりしました。なかでも忘れられないのは「胡瓜の酢のもの」でした。野菜のほとんどない船の食事で、それはまた格別のご馳走でした。

### 8. 博多港上陸

撫順を出てから1ヶ月半以上かかって、私たちは博多の港に上陸することができました。上陸のとき、私たちは頭からDDTを思い切り振りかけられました。上陸するとすぐ、母は弟と妹を入院させるため、九州医大病院に向かいました。

私とすぐ上の姉は長姉と兄に連れられて、岡山の父の実家に帰ることになりました。満員の列車には窓から乗り込みました。私たちは座席に坐ることが出来、荷物は座席と座席の間に収められました。ここでも温かい支援の手がありました。撫順の家の近くに住んでいて、兄の撫順中学の先輩であった六高生の津上青年が、博多港まで出向き、撫順からの引揚者の援護にあたってくれていました。

「撫順からの引揚の方はいませんか・・・」と、大声で呼びかけてくれました。そこで私たち家族を見つけてくれました。(次号へ続く)

次回の新聞発送作業は  
10月12日(木)午前10時半から  
民主会館で行います。  
前回お手伝いくださった方です。

青木裕  
池田  
犬飼  
真田  
竹内

#### 今後の予定

日中友好協会岡山県支部連合会総会	10月8日(日)	10:00~12:00	岡西公民館
日中友好新聞発送作業	10月12日(木)	10:30~12:00	民主会館
日中友好協会岡山支部理事会	10月15日(日)	10:00~12:00	岡輝公民館
中国百科検定学習会	10月15日(日)	14:00~16:00	岡輝公民館
日中友好協会倉敷支部理事会	10月24日(火)	13:30~16:00	倉敷公民館